

学生論文特集の発行にあたって



学生論文特集編集委員会
委員長 峯松 信明

2012年から発行が始まった学生論文特集であるが、今回で3回目を迎える。本特集の狙いは当初より変わらず一貫して次の2点にある。「日々高度化する技術を体系的に学ぶと共に研究の最先端を担っている学生に、その研究成果を論文として発表する場を分野横断的に与え、若手研究者による新しい研究交流を促進する」こと、及び「論文執筆経験が必ずしも十分でない学生に対して、より指導的・教育的な査読を通して彼らの研究活動を支援する」ことである。昨今、英語での情報発信・論文執筆を推奨する声が聞かれる。しかし優れた論文は、先行研究に対する網羅的調査を通して行なわれる新規性のある提案、信頼性の高い実験計画を通して示される提案手法の高い有効性、そして何よりも、理解性の高い文章によって論文全体が首尾一貫した論理に基づいて記述されていることが求められる。これらの項目はどれも本来、使用言語とは独立である。本特集は学生に対して、まずは母国語を用いてこれらの能力を十分に磨いて頂くことを狙って企画されている。

過去2回の特集では、「指導的・教育的な査読」という言葉が「査読基準を引き下げた査読」と誤解されているように見受けられる論文投稿があったことは否めない。しかしながら本特集では、査読基準は通常の論文と同一であり、「指導的・教育的な査読」とは、より丁寧な判定文作成、すなわち、良い点を激励し、不足している点については何故不足しているのか、どこまで補えばよいのか、を丁寧に説明することを意味する。更には著者が論文中に示した「今後の研究の方向性」とは異なる研究の発展可能性までもアドバイスすることさえある。過去2回の特集に投稿した学生の中

には、記述粒度の細かさ、そして、記述内容の豊富さに驚かれた学生も少なくないだろう。当然のことながら、通常よりも細かな査読・編集作業が必要となり、これは、関係委員の仕事量を増大させる。分野横断的な特集であり、ISSソサイエティ和文論文誌編集委員会全員によるオール・ジャパン体制を敷いてこの業務に当たった。

第3回となった学生論文特集であるが、投稿数は116編（第1回）、108編（第2回）に対して、大きく減少し50編に留まった。これは若手を対象とした他誌の類似特集号や、半年前に投稿締切を設けたISS誌「システム開発論文特集号」などが影響していると考えている。その一方で、採択率は28%（第1回）、35%（第2回）、に対して大きく向上し44%となった。これは本特集が、通常号と同様「手ごわい」特集であることが周知されたことが原因だろう。と同時に今回残念ながら不採録となった投稿についても、是非とも再チャレンジを試みて欲しい。過去2回の特集でも事後のリベンジ投稿は多数見受けられ、より高い新規性、有効性、信頼性、理解性を備えた論文として出版されるに至っている。

また、前回の特集から、新規性、有効性、信頼性、理解性の少なくとも一つの項目において特に秀逸で、学生としてよく拳闘したと称賛するに値する論文を秀逸論文として本特集編集委員会が認定する枠組みを取り入れている。採択された個々の論文を更に慎重に精査した結果、今回は、3編の論文を秀逸論文として認定した。「GPUによる2次元アンサンブル経験的モード分解の高速実行」「RoCNet：蓄積運搬転送パラダイムに基づく空間的なセルラトラフィックオフロード」「幾

何情報を保存する自己組織化可変モデルに基づく目標曲面への人体組織表面モデルの写像」の3編であり、本特集でも冒頭で掲載されている。どの論文も極めて高い有効性が指摘されており、今回の選考結果となっている。このような優れた論文を発掘できたことは、企画・編集責任者として幸甚の至りである。

現在、次期学生論文特集に向けての準備が進められている。日本の技術開発の停滞が指摘されているが、若手研究者の育成が重要課題の一つであることは言うまでもない。その意味において、領域の垣根を越えてオール・ジャパン体制で若手を支援・教育し、彼らの研究者・技術者としての成長を助長する本企画が今後も継続されることを強く願う。と同時に、本特集によって鍛えられた若手研究者がやがては査読者として、そして編集者として本特集に参加し、次世代の若手を育てる枠組みとして機能することを祈って止まない。

最後に、本特集を企画・遂行・発行するにあたり、多くの方々に協力して頂いた。ここに深謝申し上げます。

る。まずはご投稿頂いた著者陣の方々、タイトなスケジュールに拘わらず粒度の細かい丁寧な査読を心掛けて頂いた査読委員各位、そして、査読結果を丁寧にまとめて頂いた編集委員各位、更には事務局の方々など、多くの方々に協力して頂いた。再度、感謝申し上げます。

みねまつ のぶあき
 峯松 信明 (正員) 1990東大・工・電気卒。1995同大大学院工学系研究科電子工学専攻博士課程了。博士(工学)。1995豊橋技術科学大学情報工学系助手。2000東京大学大学院工学系研究科情報工学専攻准教授。2012東京大学大学院工学系研究科電気系工学専攻教授。この間、2002～2003スウェーデン王立工科大学客員研究員。音声科学から音声工学に至るまで幅広い観点から音声コミュニケーションに関する研究に従事。2007 & 2013信号処理学会最優秀論文賞。2007人工知能学会大会優秀賞。Speech Prosody 2004 Secretary, INTERSPEECH 2010 Secretary, L2WS 2010 Co-organizer, 音声研究会幹事を歴任。IEEE, ISCA, IPA, SLATE, 音響学会, 情報処理学会, 人工知能学会, 音声学会, 音声言語医学会, 発達心理学会, 外国語教育メディア学会, 日本語教育学会各会員。

学生論文特集編集委員会

委員	長	峯	松	信	明	北	原	格	吉	田	健	一
幹	事	潮	田	明	・	安	藤	英	由	樹	・	石
委	員	荒	牧	英	治	・	岩	元	浩	太	・	植
		岩	野	公	司	・	岡	野	浩	三	・	岡
		岡	田	隆	三	・	片	山	薫	・	神	篤
		籠	嶋	岳	彦	・	北	神	正	人	・	北
		吉	瀬	謙	二	・	高	倉	弘	喜	・	田
		栗	原	聡	・	高	倉	弘	喜	・	田	中
		鈴	木	伸	崇	・	福	田	洋	治	・	堀
		中	尾	恵	・	松	原	行	宏	・	光	原
		堀	山	貴	史	・	森	大	毅	・	守	屋
		目	加	慶	人	・	四	柳	浩	之	・	和
		吉	本	潤	一郎	・	柳	浩	之	・	和	田
												親
												宗
												敦
												和
												裕
												次
												仁
												彰
												生
												徹
												二
												史
												修